

「人間に学ぶ」

心の口伝

「客の帰路見えずとも、取りかたづけ急ぐべからず。」

校長室から玄関まで行き、何気なく靴べらを差し出す。たたきに降り立ちて、見送りをたたくむ校長の姿。

「明日も元気で学校へ出勤をしろよ。」

新米七年目、放送の在り方の改善を求められた日に、自分の車置き場近くで何気なく草取りをし、声を掛けた校長。

「道すがら窓は一応閉めておいたから。」

二階までに来る間、開け放った廊下の窓を閉めながら歩かれた校長。

「今日は、日本晴れだな。」

周年記念式典の翌日声を掛け、自らは忙しくあいさつ回りに行かれた校長。

「明日は、試験か、弁当持参になるな。」

独り言のようにぼつりと呟き退勤した校長。

先輩諸氏が、どう生きたかを探っていないと自分の生き方の座標軸は生まれない。

縦軸が次世代に託すべき知恵や勇氣、希望であるならば、横軸は風雪に耐えた実績と信頼がいぶし銀の光沢をもつ経験則である。

書物で学べぬ態度・判断の文化である。
・自分が夢中になって考える時間がある。
・自分はとりの子と違った何かがある。
・自分が気持ちを込めていることはこれだ。
その子なりのよきや子ども自身が自分でなければならぬ、そう感じることのできる個性的な存在、意味ある存在と
思った時に自己価値感を生む。いわゆる自己効力感である。

教育随想



西区 馬宮西小学校長

石川 智康

という自らの問題意識をもって見据え、学ばねばならない。

近年、学校は社会的な課題も門扉を越えてストリートに入ってくる。児童の発達段階においても螺旋階段の様相を呈していない。

この変化は、生活様式や社会構造の変化がもたらしているであろう。それゆえ、様々な事象に対し、最も注意深い配慮のもとに深く考え意図的・計画的に課題を解決し児童の発達を木のしげみと捉え、元氣が出る自尊の心を引き出さねばならない。

教育改革が追い風のように加速される現在、その過程が人間性の教育と言われる、豊かな心による知的な力・考える力の育成を目指すものであることを望みたい。

「人間に学ぶ」は、単に生きる力と捉えるのではなく「共に生きていく」「共に生きる」、共生の生き方の基礎である。

前掲五つの言葉は私がかえしなかな師とも仰ぐべき五人の校長の言葉であります。

「風を継ぐ」、求めるべき理想の姿である。

(いしかわ ともやす)

全ての人が体験している義務教育、多くの教育論議の中で、誰でもが求める大人・児童の人間性の回復、人間そのものの教育の原点であると認識をしている。
学校は、学習の最適期において人間形成がおこなわれる場である。教員としての人格、校長としての人格を学ぶ具体的なモデリングの場である。そのためには、「なぜだろう。」「どうしてだろう。」